

會津八一全集

第九卷

會津八一全集 第九卷

定價二〇〇圓

昭和四十四年六月二十日初版
昭和五十二年六月十日再版

著作權者 會津蘭子

發行者 高梨茂

印刷者 山元正宜

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一一
電話（五六一）五九二一
振替東京二二三四

編輯者例言

一、第九卷は、第八卷に續いて昭和十八年より昭和三十一年にいたる書簡（三百五十五通）と、採録全書簡の索引、および補遺の一部を收録した。

二、この卷にをさめた補遺の六篇は、いづれも早稻田大學文學部における講義である。そのうち「明器研究」についての寫眞版は、會津八一が當時教材として自ら編輯して、聴講の學生に所持せしめたもの——東洋美術史教材圖版『支那明器泥像』（昭和十一年刊）の一部であるが、説明は一般讀者の理解のための便宜上、ノートの意に従つて編纂者がこれを施した。また、「瓦甕研究」の本文中の圖版番號は、第二卷所收の「古瓦集存」の圖版番號であるから、閱覽に際しては同卷を參照されたい。

目次

編輯者例言

書簡 下

書簡

書簡索引

補遺

日本古代史講義

一 日本文化史の區分、名稱及びその批評

二九

二九

二二

三

- 二 飛鳥時代の重點
- 三 佛教の渡來
- 四 文字の傳來
- 五 上代の家族制度
- 六 法隆寺金堂釋迦像の銘文
- 七 『千祿字書』
- 八 金石銘文等の制作について
- 九 古代信仰と寺院の本尊
- 十 『西大寺資財流記帳』について

東洋美術史概説

- 美術といふものについて
- 美術の變質
- 明器の出現

二九四
二九六
三〇〇
三〇三
三〇五
三〇九
三一四
三一七
三二一
三二五
三三三
三三三
三四二
三四九

明器研究

明器と殉死

三五二

美術史の材料としての支那明器

三五八

明器に似た諸種の偶像

三六二

明器を作る材料

三六四

死骸とともに葬る錢の變遷

三七〇

陶土の色

三七一

犬俑

三七四

馬俑

三七六

唐草

三八〇

十二獸について

三八三

瓦甓研究

瓦甓について

四〇二

瓦といふ字の説文的考察

四一九

カハラといふ言葉

四二四

屋瓦の原始的形

四三八

『和名抄』に見える瓦の記事について

四三三

古瓦の動物文について

四四一

瓦當の文字について

四四四

半瓦當について

四四六

漢瓦の特色

四五二

漢瓦研究

四六一

漢瓦の文字の配列について

四六一

漢瓦の蔽手文様について

四六九

漢瓦の鈕について

四七五

編輯後記

書

簡

下

書簡

三三

昭和十八年一月八日

永見徳太郎宛（封書）

拜啓 御清安賀上候。陳者此狀持參の曾宮一念君は、拙者年來特別親交の間柄にて候ところ、その實父下田喜平翁のことに付きて御教示を仰ぎたくまかり出でられ候。宜しく御指導被下度、此段御紹介申上候。

正月八日

會津八一

永見徳太郎様

三六

昭和十八年二月二十一日

坂崎坦宛（封書）

拜啓 昨日はわざわざ御光來被下候ところ、風情もなく、ことに應接室は極めて寒く失禮仕り候。

趙悲菴のことは、御歸宅の後尙ほよく考ふるに、先日國民學術協會にて致したる談話の際に感じたる手持不沙汰あまりにも痛切にて、其時の不快尙ほ心頭にありて拭ひ去りがたきことを如何ともいたしがたく、素人の前にて物を云ふことは當分見合せる方がよろしきやうに存ぜられ候間、あの話は小生を抜きにして田中豐藏博士を説明者として御決行がよろしく左様に御計らひ被下度願候。但し河井氏への紹介は拙者其任にあたり可申候。小生を金持連に御紹介被下るといふことはまことにありがたく、御芳志は常に感佩致し居り候へども、いづれまた他に機會ありて御世話になることも可有之かと存じ候。

休暇前に學生をあつめ一會を催し候ことは、本日午後前田、河内等へ申つけ可申候。

さて又御話の助手の件もよく考へてみるに、先年大學本部にて拙者幹部と談合の際に申合せしことは、よし無給にても大學本部から辭令を出さざる場合に「助手」といふかた書は授けざることにて候。助手のやうな仕事をなし、「助手」といふ名も許されざるのみならず、將來に何の約束もなく、しかも無給といふ如き條件にて、果して働きくれるものなりや否や、拙者も同君へ面會の上よく相ただしおきたる上に考慮致したく候。（しかる時は單なる義勇的勞働者といふ形にて候）

二月廿一日

會津八一 敬具

坂崎様

三光

昭和十八年三月一日

大鹿卓宛（はがき）

私は十日のツバメで奈良へ行きます。松下から同行の御希望をきいてありますが、御確定になりましたら御一報下さい。東大寺御水取は十三、四の兩日が大切です。宿は奈良市登大路（帝室博物館横）日吉館です。ひるめしの爲に、米を持参の必要があるでせう。

三光

昭和十八年三月八日

宮川寅雄宛（はがき）

電報感謝。今日は當地も寒し。昨日大鹿、松下來る。大鹿と僕とはすでに十日のツバメを購ひたり。松下にも二三日奮發して奈良に來れと皆々勸告せしも、果してその繰合せがつくべきか否か疑ふべし。三浦氏は十一日夕刻日吉館に入る筈。

今回は酒などを飲みたがることをやめて、一同和歌をつくるべし。日吉館にて酒を飲むのはよろしからずと

おもふ。

六

昭和十八年三月十二日

工藤直太郎宛（はがき）

私は昨日東大寺大佛の寶前に進み自作の和歌十首を手記したる巻物を獻じました。その歌は四月號の中央公論で發表します。なほ、隨筆の再刷がすでに世に出てゐますから紙上で御批評を願ひます。

十八年三月十二日 奈良市登大路 日吉館

七

昭和十八年三月十九日

堀内民一宛（封書）

拜啓 拙者一昨日奈良の旅より歸宅し、今日は高著萬葉大和風土記の寄贈に接し、縁淺からざるが如く存じ候。愛讀して益を請けたく存じ候。書中拙作御引用下されたところもあるが如く、作者としても御禮申上候。 勿々頓首

三月十九日

會津八一

堀内民一様

八

昭和十八年四月三日

宮川寅雄宛（封書）

拜啓 心經は拙者所持致し居るよし申たるに、尙ほ御わすれ去られ候間、郵便にて返上致候。書物は、自分で欲しいとおもふもののほかは、座右にありてもかへつてわづらはしく候間、將來は一切御寄贈を謝絶可致候。金を出して書物を買ひならべたところで、學問の道は、よくかみくだき、かみわけ、かみしめて系統を立て、これをたどることに有之候。

從て、まる呑みでは學問にはならず候。暗記や受賣りも學問でなく候。從つて金もかかり候ことは論なけれども、それよりも充分なる心の餘裕と時間とを要し候。たゞ單に書物を買ひあつめ之を貯へ、又は贈答するといふだけでは何の意義もなく候。

我等近來、喫茶談笑の時のみ多く、學問研究の爲に眞劍に骨身を削る時間少く候。かくては諸君は知らず、我輩の如く前途に春秋少きものは迷惑につき、將來は往復も少く、あと勉強致したく候。書物の約束も一切消解して、昨夜松下へも載然たる書面を出し候。書道の會の如きも、諸君が何も根本的研究を爲さず、ただ追隨模倣のほかに爲すところ無き如きことならば、第二回を以て最終回として廢止致すべく候。何事にても眞に意義ある仕事は漫然たる快樂主義や、その日暮し主義では一として出来るものにあらず候。御親切は、いつも感銘し居るも、これからは一切金品何によらず物質の爲の御配慮は謝絶し、拙者、少しでも勉強のよく出来るやうに心がけたく候。

四月三日

會津八一

宮川寅雄様

六四

昭和十八年四月十九日

龜井勝一郎宛（封書）

拜復 御ていねいなる御手紙ありがたく存じ候。貴著「大和古寺風物誌」御惠投ありがたく存じ候。いつも御留心被下候段忝く存じ候。小生も幸に丈夫にくらし居り候。御安心被下度候。先日は御水取を見物の爲にならへまゐり數日滯遊いたし候。御水取はいつも試験の時期にて、いまに至るまで一度も見たることなく、今度が初めてにて候。籠りの僧たちの宿所も、一部屋ごとに訪問いたし候ところ、此の行事に参加する僧たちの態度は想像し居りしよりも遙に嚴肅なるものにて大眞面目、從つて終了の日にもなれば随分疲労の如く

昭和十八年

にも相見え候。この機會に拙作の大佛讃歌十首并序を長卷に揮毫したるものを東大寺へ寄贈致しおき候。歌は「中央公論」にかかげし如きものにて候。但し「中央公論」の序文のうち「東大寺に盧舍那の云々」とある「に」の字は衍字にて候。尙ほ今年は寺内へ拙歌の碑一基を建てたきよし、寺より申出で有之、只今考慮いたし居り候。新藥師寺香藥師は今尙ほ手がかりもなく候よし、彼地から報じ來り悲觀の至りに存じ居り候。大佛は盜難の恐は無かるべければ歌碑ばかり取り遣さることは無かるべく候。「改造」五月號「新女苑」六月號に拙歌少しづつ送りおき候。いづれ御目に入ることもあらば御批正可被下候。御書面により、久しく御家中に御病人あらるる旨承知致し、御氣の毒に奉存候。春寒尙ほ催し候。御攝養專一に遊ばさるるやう切望致し候。

四月十九日

會津八一

龜井勝一郎様

壺

昭和十八年四月二十日

後醍醐院良正宛（封書）

拜啓 先般は御邪魔致候。その時の原稿拙歌御掲載被下ありがたく存じ候。その後の歌は「大阪朝日」にも御轉載相成り、讀者側から反響もいろ／＼申來り候。然るに同種に對して、「東京」「大阪」いづれからも稿料御送附にあづからず候。拙者持ち込みしものなるが故に、謝禮に及ばずといふ御意味ならばそれにてよろしく候へども、貴方内に於ける御手違ひならば、一應取調べ被下度候。「大阪朝日」の獻金、義金等の御催しにては毎度拙者は應諾して短冊一枚三十圓にて賣れ居り候。貴社内のこと故、御取調にもならばすぐ御わかりなされ候ことゝ存じ候。現今に於て拙歌は單なる學者餘技にとどまるものにはあらず、併せて御承知被下度候。

四月廿日

會津八一

後醍醐院様

竊

昭和十八年五月十八日

松下英麿宛（封書）

拜啓 國民學術協會の研究費返上致候ところ、御受取り被下ありがたく存候。

東大寺の歌碑は、最初寺からただ歌の揮毫を乞はしただけのこと故、費用までこちら持ちになるのか否かいささか明瞭を缺きし故、島中氏へ御願致したるにて候。然るに寺の方で萬端やるらしくも相見え候。果して如何うなるのかわからず候へども、只今揮毫の原稿を同寺へ送りおき候。縣廳へも寺からすでに一應話し込みあり、改めて企劃して正式に願出るよしにて候。拙者は月末まで家を離れかね候へども、來月にもならば彼地に至るべく候。それまでにあちらですでに何とか決し居る筈にて候。もし寺にて自辨するつもりならば、折角ながら島中氏の御好意を拜謝することになるべく候。或は又此の分を他の寺へ向けるやうに願ふかもしれず候。東大寺は随分立派なるものを造るつもりらしく候間、やはり千圓はかかるらしく候。拙者只今内務の唐澤へあてて、何分適當の指令ありたしと依頼の書面を出し候。新法規は寺院内に石碑等の建立を禁止致し居り候。奈良縣にてはすでに、東大寺の申出に對しては、聖武天皇の聖業の記念でもあり、會津の筆でもありといふことにて特別の考慮をするらしく候。尙ほ唐澤から奈良縣へ何か申しやらばよろしかるべく候。尙ほ唐招提寺「おはてら」、法隆寺「いかるがのさとの」、法輪寺「觀音の」これだけは拙者すでに豫定しあることにて、前來のものとともに五基となり候。後三基にて千六七百圓くらゐにて出来るにあらずやと存ぜられ候へども、石を尋ねたり石工を搜したり歌を書いたり、すべて一人ですることは將來は致しかぬる故、誰か適當なる奔走者を見つけ金を與へて一任するつもりにて候。金も島中氏に於てころよく出しくれらる

昭和十八年

るならば、それにてよろしきも、さもなければ他に立願者は見つけ可申と存候。又島中氏立願者とならるる場合には、貴社にて誰か此の事に當りくれらるやうにならば、拙者大に助かり可申候。拙者もいろ／＼なる些事雑事にて疲勞致し居り候へば、根本的に反省致し居候。拙者生前なれば、いろ／＼やかましく註文も申し候へども、歿後ならば勿論人まかせとなるべきにて候へば、あまりこせ／＼と立ち廻らぬがよろしくあるべしと存來り候。拙者從來あまり不勉強なりしこと、今に至りて最も感慨いたし候。將來は専ら讀書と歌作に暮し可申候。

五月十八日

會津八一

松下様

六七

昭和十八年五月三十一日

上司海雲宛（封書）

陰霖相催し鬱陶しく候ところ、御多祥賀上候。本日は貴著東大寺壹部、御惠投忝く拜受致候。手に取るよりばら／＼と披覽致し候に、甚だ豊富なる材料にて甚だ行きとどきてこまやかにものされ居る如くに上存候。いづれよく拜見可致候。東大寺研究として大なる御貢獻と存じ候。雜華は先日澤山頂戴致し、諸人へ相わかし申候。歌碑の歌の選擇は、貴利の御意見として十首中の最後のものを望まるよしを申し越したる人あり、此人は寺外の人なれども、風聞のまま申越されたるらしきも、それに基きてかの一首を清書してすでに管長の御手もとへ御送り申上げおき候。

拙者近日或は西下して拜眉の機會あるべしと存じ候。しかしいつも應接に勞るのみにて、歌も仕事も出來かぬこと多く、もつたいなき事ながら、いささかまた困りもいたし候。それ故今回は拙者西下のことは、一切御内密に願度候。ことに揮毫はすべて謝絶と御ふくみ被下度候。當地に在りても謝絶致し居り候ことに